特集・都市生活と動物❶

◎人と動物の関係を考える

■林　良博

1—人と動物とのかかわり
2—動物を三分類：家庭動物、産業動物、野生動物
3—二十一世紀の人と動物の関係
4—成熟社会——多様性を認め合う議論を

1—人と動物とのかかわり

人類は五百万年の歴史を持っていますが、人と動物の関係は人類が誕生してから現在まで途切れることなく続いています。どんな関係が重点であったかはその時代・時代によって異なりますが、人と動物の関係のありとあらゆる関係性の萌芽が、人類が誕生した時に存在していたかもしれません。

❶—食べる対象としての動物

人と動物との大きな関係のひとつは、食べる・食べられるの関係です。人類は雑食性の動物種ですが、ここまで発達してこられたのは、多くの人々が指摘しているとおり、肉食を好んだ種であったことが挙げられます。肉食の霊長類でなければ、他の霊長類とこれほどまで差別化できなかったでしょう。

余談になりますが、人類の肉食性はこれからの食糧事情を考えると深刻な問題です。経済的理由で肉食を高められなかった開発途上国が豊かになれば、人類全体で食べる肉の量はもっと多くなり、世界の食糧不足を加速させる危険性があります。

しかし人類という種を考える場合、動物を食べる種だという認識が必要です。これが人と動物の大きな関係性の一つであることは今後とも無視できないものです。

❷—共に生きる対象としての動物

最近多くの人々が関心を持っていることは、他の動物種と暮らしたいということです。こうした要求は最近とくに強まっていますが、昔から人類は動物を追いかけ回していただけではありません。縄文時代に犬と住居で一緒に暮らしていた証拠が出ています。たとえば住居内に犬の足跡があるとか、犬を埋葬している習慣があったということは、犬に対する強い思い入れがあったことを示しています。動物と共に生きるという考えは、最近始まったことではありません。

ところで、日本人が飢えなくなったのは、たかだか五十年前からのことです。人類の五百万年の歴史からみれば、飢えなかったことは殆どありません。世界的には、六十億人の中で慢性的に飢えている人は十億人を越えていますが、先進諸国では幸いなことに飢餓の問題は少なくなりました。その結果、ようやくゆっくりと動物との関係を見直すことができる時代になったといえます。私たちは二十世紀の科学技術の成果を、このような形で享受しているのです。

動物との共生を考える豊かさを享受しながら、一方で食べる肉の量がかつてない程までに高まっているという、矛盾に満ちた時代に私たちは生きています。

今日の日本において人と動物の関係を考える場合、この矛盾した現実を認識すべきでしょう。しかし自己嫌悪に陥る必要はありません。一見すると矛盾した関係性を考えることができるようになったのは、私たちが成熟した社会に生きている証拠であると、プラスの評価をした方がよいと思います。

2 動物を三分類：家庭動物、産業動物、野生動物

ここで、人と動物の関係を整理するために、動物を大きく三つに分けて考えます。家庭動物、産業動物、野生動物の三つです。この三つの動物を相手に、私たちは人間とのかかわりを考察したいと思います。

❶家庭動物と暮らす

一緒に暮らしたいと望まれている動物たちを家庭動物と呼ぶことにします。かつてペットと呼ばれていた動物たちです。最近は伴侶動物という呼び方も多くなっています。このようにペット、伴侶動物、家庭動物と呼び方がいろいろあること自体が、人と動物の関係を考える上で重要な視点を提供しています。

ある人にとっては、ペットと呼ぶのがふさわしい。しかし、別の人にとっては、相互依存が強い関係になっていて、ペットという言い方では、自分と動物との関係を言い表せないので、伴侶動物と呼んだ方が適切だということがあります。

人と動物の関係をどう考えるかについて、日本はいま大きな変換点に立っています。呼び方がいろいろあることは、動物との多様なかかわりが存在することを象徴的に示していると考えられます。

私たちが「ヒトと動物の関係学会」を設立したのは、こうした人と動物の多様な関係を様々な角度から検討しようとしたためです。

❷産業動物と福祉

二つめは産業動物です。これは主に食べるために飼育されている動物です。食べるための動物の重要性は、動物との共生が強く主張されるようになった現在でも少しも減じていませんし、むしろ大きくなっています。これは、日本で飼育しているか輸入しているかを問わず、関係性を考えなくてはいけない動物です。この産業動物には、かつて軍馬や使役馬などが含まれていましたが、今日の日本では激減しました。一方、医学を進歩させるために開発された実験動物もこのグループに含めていいと思います。

人と産業動物との関係は、重い関係性です。好むと好まざるとにかかわらず、動物を食べて私たちは生きているという関係にあります。人類の原罪ともいえるもので、学会としては取り上げにくいものです。

しかし逃げることはできません。結果として殺さざるを得ないとしても、殺すまでの間は快適に暮らせる条件をきちんと保証すべきだという動物福祉の考えが、日本でも強くなってきました。イギリスでは「動物が苦しむような不適切な環境で飼育した肉は商品として扱わない」という流れが起きてきましたし、近い将来EU全体に広まるでしょう。ヨーロッパと日本ではかなり事情が異なりますが、そう遠くない将来に日本でもこうした流れが強まると考えられます。

最後に殺してしまうのだから、動物にどんな生活を強いても構わないという人は日本にいないでしょう。しかし、動物にとってより良い条件をつくった結果、産業として成立しなくなればその産業は滅びてしまいますので、この問題の解決は厳しいのです。

かつては、快適な条件で産業動物を飼育すれば、その肉の品質も高まるというのが動物福祉のメリットといわれました。また良い条件で飼育すれば、乳量も増えるという成績が、産業動物の福祉と産業の発展が二律背反ではなく、共存できることの根拠とされたのです。しかし最近では、「肉がおいしくなろうがなるまいが、乳がたくさん出ようが出まいが、産業動物も生きている間は快適な生活を送るべきだ」という意見が強くなっております。そうした流れのなかで、産業動物のストレスを減ずる飼育法を開発するために、動物行動学的研究が進められています。

❸野生動物と自然環境

三つめは野生動物です。家庭動物と産業動物は所有者がいますが、野生動物は所有者がいない無主物です。この野生動物とのかかわりも、最近多くの人達が真剣に考えています。

日本では長らく、野生動物は山にいて時々里に顔を出して「困ったもんだ」で済んでいる関係が続いてきました。日本のように森林が多い国ではそこに動物が棲み、人は里に住んでいました。お互いの棲み分けができていて、人間が山に入る時は畏怖の念を持っておりましたし、動物が里に来る時はそれなりの覚悟をもっていたに違いありません。しかしそういう平和な時代は近代に入って完全に終わりを告げました。それは、人間側からの彼らの棲み家への侵出によるものです。人工林をつくり、山を切り崩してゴルフ場やスキー場を造り、道路を走らせた結果、山と里との